「外国人」「移民」「外国人労働者」：日本における移民ディスコースが構築する人種の階層

鳥　越　千　絵

1.「移民国」である日本

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックが近づき、観戦のために日本にやってくるであろう外国人観光客を「おもてなし」[1] する準備が急ピッチで進んでいる。日本政府観光局のデータ（2018）によると、2007 年から 2012 年にかけては例年約 835 万人程度 [2] だった訪日外国人観光客数は 2013 年から急激に増加し、2017 年には 2,869 万人を超えた。国土交通省観光庁は、2020 年には 4,000 万人の外国人観光客を呼び込むことを目標としており、観光施設や公共交通機関、宿泊施設、道路標識などを外国人目線で整備を進めるように働きかけている（観光庁, 2018）。外国人観光客のために環境を整えるだけでなく、開催地となる東京都では「外国人おもてなし語学ボランティア」の育成講座を都が開催し、外国人観光客をサポートする市民の育成を行っている。このように、オリンピック・パラリンピックを前に日本を挙げて「外国人歓迎」ムードを盛り上げようという動きがある一方で、外国人観光客ほどは歓迎されていない外国人がいる。それが外国人労働者や移民とよばれる外国人である。

日本は正式な移民政策をとっていないため、日本政府が定める在留資格に「移

---

[1]「おもてなし」精神は日本の文化であるとして、2013 年に行われた東京五輪招致プレゼンテーションのテーマの一つになった。

[2] リーマンショック後の 2009 年には約 679 万人、震災のあった 2011 年には 622 万人に減少している。

民」というカテゴリーは存在しないが[3]、日本が受け入れている外国人労働者の数をみれば、日本は事実上「移民国」であると言わざるをえないだろう。2017年に日本に在留している外国人労働者数は約128万人で、2008年の49万人から倍以上増えていることがわかる（厚生労働省，2018）。また、OECD加盟国が2016年の1年間に受け入れた外国人労働者数を比較すると、日本はドイツ、米国、英国に続き第4位であるというデータもある[4]。外国人労働者数の増加は、少子高齢化による労働力不足を埋めるため、日本が外国人留学生アルバイトや技能実習生を含む外国人の労働力に既に頼っている状況であることを示している。しかし、歓迎されている「外国人観光客」とは異なり、「外国人労働者」の数が増加することについては抵抗を感じる日本人は少なくない。2018年12月8日の臨時国会で出入国管理法の一部が改正され、外国人労働者を受け入れる間口を更に広くする法律が成立した際には、反発の声が多く挙がった。

なお、この法律は「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」（法務省入国管理局，2018）と正式にはよばれるのだが、メディアでは「外国人材法案」や「外国人材拡大法案」などと呼ばれることが多い。この法案に関する報道でも、外国人の労働者のことをこれまでのように「外国人労働者」ではなく、「外国人材」というあまり聞きなれない名称で言及するメディアもある。「外国人材」と「外国人労働者」の辞書的意味にはさほど違いはないはずなのだが、政府はあえて「外国人労働者」とは言わずに、「外国人材」の受け入れが日本の発展には必要不可欠であると主張するのである。

このように特定の集団を表すラベルが変化することを、単なる偶然や気まぐれだと見過ごすことはできない。なぜならラベルの変化は多くの場合ディスコースの変化であり、そこにはイデオロギー的な力が働いていることが多いからである。「外国人」は歓迎し、「移民」は受け入れず、「外国人労働者」の労働力は当てにしつつも受け入れを拡大には不満と不安がある一方で「外国人材」

---

[3] 国連によれば、「移民」の明確な定義はないとしつつも、出生国ではない地に3か月から12か月移住をすれば短期移民であり、それ以上であれば長期移民であるとしている。

[4] OECD.Stat International Migration Database より
（https://stats.oecd.org/Index.aspx?DataSetCode=MIG）

は必要であると主張する日本には、外国人を「受け入れる他者」と「排除する他者」とに区別する複数のディスコースが存在していると考えられる。そこで本研究では、日本の移民ディスコースにおいて異なるラベルの使用が外国人をどのように他者化しているのかについて調査する。

2. 移民・難民と人種のディスコース

メディアディスコース[5]や政治的ディスコースにおいて移民や難民がどのように語られ、表象されているかという研究の多くは、移民・難民に関するディスコースが人種主義的なイデオロギーを再生産していることを示している。人種ディスコース研究の権威の一人である van　Dijk は、メディアや政治ディスコースは特定の特権階級のみがアクセスできるものだとして「エリートディスコース」と呼ぶ。彼の一連の研究は、1990 年代から 2000 年代における移民・難民に関するエリートディスコースが人種主義的階層を構築し、維持し、正当化する役割をもっていることを明らかにしている（van Dijk, 1995, 1997, 2000a, 2000b）。van　Dijk は英国の全国紙や議会での討論などに焦点を当てて批判的ディスコース分析を行っているが、そこに発露する人種主義的ディスコースのパターンの一つが ideological　square とよばれるものである。Ideological square とは、「我々」はポジティブに（Positive-Us）、「他者」はネガティブに（Negative-Others）語られることで対立的な我々―他者という構造が作られ、他者への排他的な行動や言動、態度が正当化されることを指す。例えば、移民・難民に関する英国議会の討論では、移民・難民は、違法滞在者、犯罪者、社会に寄生するものであり、「我々」の規範を守らない社会のお荷物として語られる一方、「我々イギリス人」は「善良な納税者」であり、移民・難民が引き起こす問題の「被害者」として語られる（van Dijk, 1997, 2000a）。こうした「ポジティブな我々」と「ネガティブな他者」のディスコース的構築によって移民や難民の排除が正当化されると van　Dijk は主張する（van　Dijk,　1997,　2000a）。van

[5] ここでいうメディアとは、SNS や個人が配信する動画などではなく、新聞やテレビ、ラジオなどを指す。

Dijk の Ideological square は人種ディスコース研究のフレームワークのひとつとして認識されており、同様のディスコース的現象がイギリスの新聞における移民・難民表象の研究（Lynn & Lee, 2003）や、オーストラリアにおけるアジア系、中東系移民・難民に関する政治ディスコースの研究（Every & Augoustinos, 2007）などでも明らかにされている。

Ideological square に限らず、移民・難民がメディアや政治ディスコースにおいてネガティブに表象されることは今に始まったことではない。例えば、Flores（2003）が 1920 年代から 1930 年代の米国メディアにおいてメキシコ人移民がどのように語られているかを分析した研究では、受け入れ初期には従順で働き者だと形容されていた彼女／彼らが次第に国を脅かす存在として表象されていく様子が示されている。また、1993 年から 1994 年に出版されたロサンジェルスタイムズの新聞記事における移民の比喩を分析した Santa Ana（1999）の研究は、メキシコ移民が動物、犯罪者、雑草、重荷、病気、ごみ、洪水などの災害に例えられて語られていることを明らかにしている。メディアディスコースと同様に、米国政府の入国管理局（INS）が作成した国境の警備強化に関するビデオのなかでも、メキシコ人移民はギャング、売春婦、麻薬の密売人、密入国者といったステレオタイプ的でネガティブな表象しかされていないことも指摘されている（Demo, 2005）。

ポスト人種時代と言われる現代では、こういったあからさまな人種主義的表現は減っていると考えられるものの、近年でも移民・難民が人種的他者として表象されていることを示す研究は少なくない。例えば、Rasinger（2010）はイギリスの地方紙の見出しを分析し、移民の増加を災害に例えて表現するというパターンは今でも存在していることを指摘し、移民を「危険なもの」として構築することは、読者をその危険から守られるべき存在として対照的に構築することでもあると述べている。マレーシアの政治的ディスコースを分析した Don & Lee（2014）は、難民の違法性、犯罪性に焦点を当てることで、マレーシア政府が難民の排除を正当化していることを指摘している。Jacobs（2017）は、ベルギーのフランドル地方で放送されている犯罪に関するテレビ報道を分析し、EU 圏外、とくに北アフリカからの移住者による犯罪は、EU 圏内からの移住者

によるもの以上に国にとって脅威であるという描かれ方をしていることを明らかにしている。

このように、移民・難民をネガティブに表象することで彼女／彼らを人種的他者として構築するディスコースが存在する一方で、近年の人種主義的ディスコースはより目につきにくい形に変化してきているともいえる。その一つの例が移民・難民に関するラベルである。例えば、ノルウェー在住のアイスランド人移民の語りと、彼女／彼らに関するノルウェーメディアのディスコースを分析したGuðjónsdóttir & Loftsdóttir（2017）は、「移民」というラベル（アイスランド語では*innflytjandi*、ノルウェー語では *innvandrer*）が人種化されたものであると主張している。この研究によると、ヨーロッパにおいて「移民」というラベルは、非白人、非ヨーロッパ人、単純労働者を想起させるものであり、ノルウェー在住のアイスランド人自身も自らを「移民」のラベルで語ることはあまりない。また、ノルウェーメディアも通常アイスランド人を「移民」と呼ぶことはなく、あったとしても民族的・文化的にノルウェー人と近い親戚のような「望ましい移民」であり良く働く人々として語り、いわゆる「移民」（非ヨーロッパ系、非白人移民、特にイスラム系移民）とは対比して語られることが多いという。「移民」というラベルが人種化されていない中立なものであれば、ノルウェーで働くアイスランド人も「移民」と言及されるはずだが、「移民」ラベルからはヨーロッパ系白人が除外されているのである。これは、「移民」というラベルが人種化されていながらもそれが可視化されていないという、まさに現代の人種なき人種主義ディスコース的様式であるといえるだろう。

移民・難民に関するラベルが中立的なものでもランダムに使用されるものでもないということはKhosraviNik（2010）の研究からも言える。KhosraviNik（2010）は、英国で出版された複数の新聞において移民・難民がどのように表象されているかについて調査し、immigrant, migrant, emigrantという三つのラベルに与えられているネガティブな意味づけの度合いが異なっていることを指摘している。この研究によると、immigrantというラベルは、違法性、犯罪などと結びつけて使用されることが多く、英国の社会問題としての移民について言及される際に使用される。その一方で、emigrant/emigratedというラベルは

成功者のライフストーリーや弔辞のなかで、言及されている人物の一つの特徴のような形で使用されることが多く、どちらかというとポジティブな意味合いを持つことも多いという。三つ目の migrant というラベルは、これまでの二つの間に位置するようなラベルであるが、immigrant の代わりとして使われる頻度は、emigrant よりも高いという。

これまでに挙げた研究が示すように、移民・難民は様々な国のメディアディスコースや政治ディスコースにおいて、ネガティブな存在として人種化され、他者化されてきた。そして近年では、移民・難民を指し示すラベルの意味づけにおいて、人種という概念は透明化されたままで人種の階層化が行われていることも明らかになっている。これらの移民・難民ディスコースに関する研究の多くはメディアや政治といったマクロレベルのディスコースに焦点を当てているが、人種主義のシステムはマクロレベルのディスコースだけではなく、個人的対話や日常的な発言などのマイクロレベルのディスコースにおいても構築され、維持されるものである（Essed, 1991）。そこで本研究では、日本の移民・難民に関するマイクロレベルのディスコースに焦点を当て、以下の二つのリサーチクエスチョンを設定する。

RQ1.　日本の移民・難民ディスコースにおいて、「外国人」「移民」「外国人労働者」というラベルにはどのような意味づけが行われているのだろうか。

RQ2.　日本の移民ディスコースにおけるこれらのラベルの使用を通して、日本人は「我々」と「他者」とをどのように位置づけているのだろうか。

3. 理論的枠組みと研究方法

本研究では、日本における「外国人」「移民」「外国人労働者」に関する語りについてディスコース分析を行った。ディスコース分析は分析方法（Method）でもあるが、研究分析の理論的枠組み（Methodology）でもある（Phillips & Hardy, 2002; Phillips & Jorgensen, 2002）。そのため、この章ではまず本研究の

理論的枠組みである Wetherell & Potter（1992）の Discursive Psychology について簡潔に述べ、分析のガイドラインとなる Interpretative Repertoire と Positioning について説明を行う。次に、データ収集方法およびコード化の方法について言及する。

3.1. Discursive Psychology とは

ディスコース分析には様々なアプローチが存在するが、多くのアプローチに共通しているのが、ディスコースとは既に存在する現実やアイデンティティーを単純に反映する会話テキストのみを指しているわけではなく、現実や意味、社会的位置づけ（Positioning）を創りだすものだという認識である。より社会構成主義的なディスコース分析は、特定のコンテクストにおける詳細な言語使用に焦点をあて、そこでどのような現実や意味、アイデンティティーなどが構築されているかというマイクロレベルのディスコースを検証する。その一方でより批判的アプローチに基づくディスコース分析は、詳細な言語使用が構築する意味やアイデンティティーというよりは、メディアや政治、教育といったマクロレベルのディスコースの生成、消費、構造や背景を検証し、ディスコースとイデオロギー、搾取や支配、抵抗といった権力の関係性に焦点を当てる（Phillips & Hardy, 2002）。これらの両方の視点を併せ持っているのが Wetherell & Potter（1992）の Discursive Psychology である。

一般的な Discursive Psychology は 1980 年代にイギリスで発展した社会構成主義的なアプローチであり、マイクロレベルでの言語使用を分析するものが多い。しかし、Wetherell & Potter（1992, Potter & Wetherell, 1987）はそこに批判的視座を導入し、マイクロレベルのディスコースとマクロレベルのディスコースの相互関係に焦点を当てているというのが特徴的である。このアプローチは、日常的な言語使用を分析することで、現実や社会的位置づけを構築するためにどのようなディスコース資源（言葉やフレーズ、イメージ、比喩など）を社会が人々に与えているのか、そしてそこでどのような権力関係が構築・維持されているのかを検証することを目的としている。本研究のように個人が特定のラベルをどのように使うかというマイクロレベルのテキストに焦点をあて

つつ、マクロレベルのディスコースの影響についても考慮するという場合には、Wetherell & Potter（1992）の Discursive Psychology は適したアプローチだといえるだろう[6]。

なお、Wetherell & Potter（1992）の Discursive Psychology には Interpretative Repertoire と Positioning という二つの分析の枠組みがある。Interpretative Repertoire とは、自分の現実や社会的位置づけを構築し、正当化するために個人が使用する一連の言葉やイメージのことを指す。特定の Interpretative Repertoire がディスコース的「資源」として多くの人々に使用されることを通して多数派のイデオロギーが再生産されるが、その多数派のイデオロギーを支持する Interpretative Repertoire が「常識」「当たり前」であると認識されることで権力構造が透明化され、維持されていく。そのため、ディスコースにおいてどのような Interpretative Repertoire が発露しているのかを分析することで、どういったイデオロギーが透明化されつつ維持されているのかが見えてくるのである（Wetherell & Potter, 1992）。

二つ目の枠組みである Positioning は Positioning theory（Harre & Langenhove, 1999）に基づいている。この理論は、個人のアイデンティティーや社会的位置づけは言語使用によって行われるが、特定のコンテクストにおいて使用可能なディスコースとそれが支持するイデオロギーによってその行為が制限されることを説明している。Wetherell & Potter（1992）の Discursive Psychology は、「我々」と「他者」がディスコースにおいてどのように位置づけられているか、すなわち Positioning を分析することによって、社会の権力構造が構築、再構築されたり、抵抗されたりするプロセスを明らかにすることを目的としている。

以上の理論的枠組みおよび分析的枠組みに基づき、本研究では日本の移民

---

[6] ただし、本研究はマクロレベルのディスコースについては今回対象とするディスコースのコンテクストとして捉えるにとどまり、実際の分析を行っているわけではない。したがって、本論文だけでは厳密には Discursive Psychology の「完成形」とはいえず、この論文は Discursive Psychology を使用した研究プロジェクトの一部だということになる。

ディスコースにおける「外国人」「移民」「外国人労働者」というラベルの使用というテキストに着目し、そこにどのような Interpretative Repertoire が発露するのかを探り、同時に「我々（日本人）」と「他者（外国人）」がどのように位置づけられているかについても考察する。

3.2. データ収集

2017 年 1 月に大学 1 年生 104 名を対象にアンケートを行った。まず始めに「外国人」「移民」「外国人労働者」という言葉を聞いてそれぞれどのような人物を思い浮かべるか、見た目、性格、出身国や地域、職業などを含めて詳しく描写してもらった。その後、「外国人」「移民」「外国人労働者」それぞれの受け入れを拡大することについて賛成か反対かを 5 段階の尺度で答え、その理由を詳しく説明するよう求めた。

自由記述の回答は全て書き起こし、「外国人」「移民」「外国人労働者」のラベルごとにまとめた。受け入れ拡大についての回答は、三つのラベルごとに「賛成」「どちらかといえば賛成」「どちらでもない」「どちらかといえば反対」「反対」の回答数を集計した。

3.3. コーディング

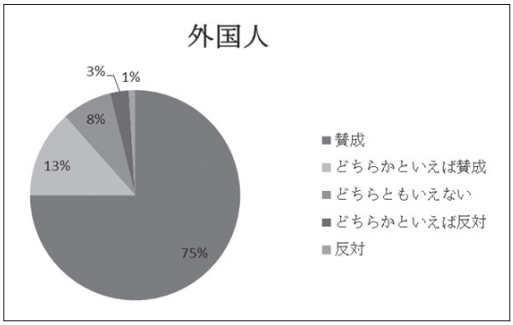
まず、Interpretative Repertoire を抽出するために、自由記述の回答を「外国人」「移民」「外国人労働者」の三つのラベルごとに繰り返し読み、頻出する名詞や形容詞、比喩、表現、イメージを拾い上げた。次に、三つのラベルを横断する形で拾い上げた言葉やイメージに繰り返し目を通し、ラベル間で異なるものを重点的にマークし、カテゴリー化を行った。

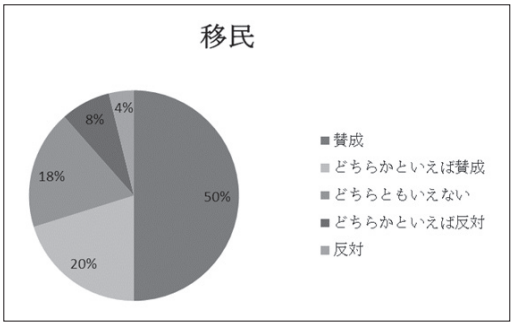
次に、「我々」と「他者」の Positioning に注目し、再度自由記述の回答に目を通した。日本語は主語や目的語を省略する言語的特徴があるため、「我々」の Positioning は「日本人」「日本」「私たち」という言葉だけでなく、省略されているが前提となっている主語や目的語にも注目した。「他者」の Positioning についても同様に、「外国人」「彼ら」という言葉だけでなく、省略されている主語、目的語についても、外国人について言及している場合は「他者」の

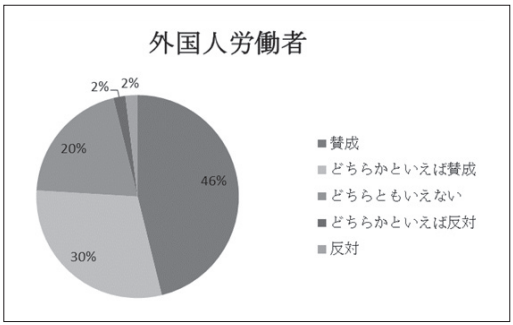
Positioning としてコード化した。また、コード化の際には Ideological square が示すような Positive-Us, negative-Others という対照的な Positioning に焦点を当てた。

4. 結果

「外国人」「移民」「外国人労働者」それぞれの受け入れ拡大についてどう思うかという質問に対しては、「賛成」「どちらかといえば賛成」という回答の合計が「外国人」では約 88%、「移民」では 70%、「外国人労働者」では 76% であった。数字上はこれら三つのラベルを含む外国人を受け入れることについては 7 割以上が賛成しているということになる。しかし、Interpretative Repertoire と Positioning という分析の枠組みに基づきデータの分析を行った結果、「外国人」「移民」「外国人労働者」というラベルの使用を通して彼女／彼らが人種的「他者」としてそれぞれ異なる意味づけをされており、またそこに人種の階層が構築されていることが明らかになった。この章では、まずこれら三つのラベルそれぞれにどのような人種マーカーがみられたかをまとめる。次に、各ラベルについての語りのなかにどのような Interpretative Repertoire が発露したかについて説明する。最後に、三つのラベルの使用を通して「我々」と「他者」がどのように Positioning されているのかについて述べる。







4.1.「外国人」

「外国人」という言葉は、本来であれば外国人観光客、外国人労働者、外国人移民のすべてを含むものである。しかし、日本における移民ディスコースにおいて、「外国人」とは外国人労働者や外国人移民とは異なるグループを指すラベルとして使われることが多い。ここでは「外国人」についての語りのなかにみられる人種のマーカーと、「外国人」に関する Interpretative Repertoire についてまとめる。

4.1.1.「外国人」ラベルに見られる人種のマーカー

「外国人」というラベルからイメージされる人物像についての回答の多くがヨーロッパ系白人というものである。回答の中で頻出した人種に関する単語の例と回答数は、「アメリカ」(42)、「ヨーロッパ」(36)、「白人」(35)、「黒人」

(12)、「アジア人」(10) であった[7]。

「外国人」のラベルに関しては、他の二つのラベルと比べて外見についての言及が多く、肌や目の色、髪の色、骨格の違いなどについて描写しているものが多くみられた。実際の回答例は次のようなものだ。「外国人と聞いて一番最初に思い浮かぶのは白人で金髪で長身の人です。ヨーロッパや北米の人が一番に思い浮かびます。」「アメリカ人など白人の背の高い男性。」「白人・黒人、かっこいい、目が青い」「髪の色、目の色など外見がいつも見る日本人とは異なっている」「アメリカ、イギリス、オーストラリアなどの母国語が英語で髪はブロンド、目は黒でなく青いイメージがあります」「アジア人よりも白人と黒人を思い浮かべる。背が高い。」「肌の色が白くて、瞳の色が青など。アメリカやイギリス、イタリア、フランスなど欧米人。」

また、「外国人」についての語りのなかでは、ポジティブな性格や性質、能力についての言及が多くみられたことも特徴的である。特に、「人柄が良い」という回答は 26 もあり、他の二つのラベルと比べて多い。性格や性質、能力に関する描写の例には以下のようなものが挙げられる。「温厚な人が多そう」「自分をしっかりもっている」「明るい」「フレンドリー」「自己主張が日本人よりできる」「性格→生き生きとしている」「性格は内向的な人よりも社交的な人を思い浮かべがちです。」「紳士的で優しい、積極的」「感情豊かではきはきしているイメージがあります」「日本人と比べて自分の意見をしっかり持っており、その主義を貫き、周りの人にその意見を話すことを恐れない」「頭が良くて勤勉、居眠りしなさそう。」

なお、「外国人」のイメージとして白人や中国人を挙げた対象者のなかには、「外国人」はお金を持っている観光客か、いわゆるホワイトカラーといわれる職業に就いているイメージであるという回答もみられる。「中国人の爆買い客」「欧米人、男性、サラリーマン」「ヨーロッパ系、アメリカ、ビジネスマン」「白人系ないしアジア系を想起する。観光客が主な印象。富裕。」「アメリカ、イギリス、

---

[7] 本研究は質的研究であり、数値化をすることが目的ではない。しかし、回答数はいかに他のラベルとは異なる意味づけが行われているかを判断する材料の一つにはなり得るだろう。

ALT の先生」「アメリカ出身で IT 関係などの仕事をしているイメージ」といった回答は、人種と職業、階級が交差していることを表す例だといえる。

4.1.2.「外国人」に関する Interpretative Repertoire

「外国人」の受け入れ拡大に対する賛成意見が 88% を占めたことが示しているように、「外国人」はポジティブな意味づけをされることが多い。今回分析したディスコースにみられた「外国人」に関する Interpretative　Repertoire は、「外国人は日本の経済、産業の発展や教育に貢献している」というものであり、これはグローバル化や国際化、社会の多様化というディスコースのポジティブな側面にリンクしていることがうかがえる。

国境を越えた人の移動や資本の移動が社会に利益をもたらすというのはグローバル時代に浸透しているディスコースであり、「外国人」のラベルを使用して「外国人」の受け入れを語る際には、このディスコースが再生産されていると言えるだろう。

まず、「外国人」＝観光客であるという意味付けのもとで、「外国人」が日本に来ることは日本の観光産業が栄えることを意味するという語りは多い。

- 日本に外国人が来ることで国が豊かになると思う
- 日本を訪れる観光客や旅行者が増えれば、日本にとっても利益になり、とてもありがたいことだから
- 外国人はやはり旅行などに多く来れば来るほど経済効果もでかく日本の経済のためになる

また、「外国人」は日本の産業の発展に必要な専門知識や技術、教育に役立つ言語というリソースを持ち込む存在としても語られる。

- 外国人：専門性を持つ人物は日本にとってプラスだから。
- 外国人と関わりをもつことで視野が広がる。世界に通用する商品をつくることができる
- ALT の先生など日本人の語学教育において重要な役割を果たすから
- 語学教員はやはりネイティブのほうが良いと思う

こういった「外国人」についての Interpretative Repertoire は、他のラベル

との対比の語りのなかで特に浮かびあがってくる。

- 外国人が多くくることで観光業が栄え、経済がまわる。移民は多く問題をかかえていることがあるからどちらともいえない
- 外国人が増えることで経済効果があるとおもう。移民や外国人労働者が増えると日本人の仕事が減ってしまうかもしれない
- 外国人は日本の産業発展の面で大きな力になりそうだから。外国人労働者は日本企業が現地に造った工場で働いたら良いと思う

このように、「外国人」というラベルと「外国人は日本に経済的・産業的・教育的利益をもたらす」というグローバル化ディスコースを再生産するInterpretative Repertoireは、欧米系白人で専門知識や技術を持つもの、経済的に余裕のあるものは「外国人」として歓迎をするが、そうではないものは歓迎しないという人種主義的、階級主義的な線引きを、「人種」や「階級」という言葉を使わずに行うことを許容していると言えるだろう。

4.2.「移民」

2008年に日本人大学生を対象に移民についてのインタビューを行った際には、移民という定義がわからないという対象者や、移民といえば日系移民のことしか浮かばないという対象者が多かった（Torigoe, 2011）。しかし、当時から約10年が経ち、今回の調査では「移民」というラベルが持つ意味が変わったことがわかる。意味づけが変化する要因の一つとなったのは、近年の米国やヨーロッパ各国での移民・難民問題であり、メディアを通して得たこれらの情報が日本人大学生による「移民」ラベルの意味づけのコンテクストになっていることが今回の調査からみえてくる。

4.2.1.「移民」ラベルにみられる人種のマーカー

アンケートの回答として日系移民に言及したのは104人中2名しかおらず、多くは米国のメキシコ系移民やヨーロッパの中東系移民（しばしば難民と混同される）をイメージしている。「移民」と聞いて思い浮かぶイメージとして挙げられたものとしては、「黒人」(20)、「ヨーロッパの中東系移民」(18)、「メキシ

コ人」(13)、「東南アジア系」(10)、「肌が浅黒い、褐色」(5) などの例がある。

また、ヨーロッパやアメリカにいる「移民」は「貧困」と同時に語られることが多く、「みすぼらしい」「やせ細った」「少し貧しそうな服装をしている」「ボロボロな服」といった外見についての言及もあれば、「貧しい」「あまり豊かではない職業」「低い賃金」「不安定な職業」「正規雇用では働いていない」「発展途上国出身」「余裕のない生活を送っていそう」「経済的に苦しい生活をしている」「貧困が厳しい国から豊かで平和な国へ移住した人たち」「失業者」といった出身国や移住先での生活における経済的苦しさへの言及もある。

こういった貧困のイメージと重なる部分もあるが、「苦労をしているかわいそうな人々」というのも「移民」ラベルの意味づけとして多いものである。「戦争から避難」「受け入れてもらえる国が少なく、身を追われる立場の人が多いイメージ」「国の情勢や家庭崩壊などの影響で移り住む方」「出身国での生活に難があった人。中東の人が多いのかなというイメージがあります」「その国の治安が悪く、働いたり、子供が学校にいけないような人たちが違う国に移り住む」「国から逃れた人」「何か自分の国にいられない理由があって移り住んでいる。」「何か苦しい事情を持った人」「母国で大変な目に遭った」「紛争地域からヨーロッパの先進国に逃げ込んだ人々」といった回答例が示すように、「移民」ラベルには難民に近い意味づけが行われていることが多い。こういった白人ではなく、かわいそうな「移民」に対する語りには、どのような Interpretative Repertoire が発露しているのだろうか。

4.2.2. 「移民」に関する Interpretative Repertoire

「移民」の受け入れ拡大には 70% の対象者が賛成もしくはどちらかといえば賛成だと答えている。「賛成」だと答えた回答者は、「反対する理由がない」「戦争や災害などで生まれた土地を追われた人たちを迎え入れることに賛成である。なぜならその人たちは帰る場所もなく、もし入国を断れば行く場所もなくなると思うから。」「移民とか受け入れたら、少子化の問題も解決できる」などの理由を挙げているが、興味深いのは「どちらかといえば賛成」もしくは「どちらともいえない」を選択した回答者による語りである。Wetherell &Potter (1992,

Potter & Wetherell, 1987）は、語りの中の矛盾にこそInterpretative Repertoireが発露するという。実際に「移民」については「どちらかといえば賛成」「どちらともいえない」と回答しながらも、理由を説明する際には移民に対するネガティブな態度や反対意見を述べているものが多く、ここに現れるイメージやパターンこそが、「移民」に関するInterpretative Repertoireだと考えられる。

まず一つ目のInterpretative Repertoireは、「移民は日本の文化や規則に適応できない」というものである。実際の語りの例としては以下のようなものが挙げられる。なお、カッコ内は賛成から反対までの五つの尺度でどの選択肢を選んでいたかを示している。

- あまりにも多くなると文化の違いなどにより私たちが暮らしにくくなる（どちらかといえば賛成）
- 困っている人を助けたい気持ちはあるが、多すぎたら日本の文化が薄れていってしまうのではないか。（どちらともいえない）
- 移住となると日本の規則に従わない人が増えると思うので、それは不安です（反対）

なお、一見すると賛成意見ではあるが、「移民は日本の文化や規則に適応できない」という前提があることが見え隠れする回答として以下のような例もある。

- 参政権などはないが、それらについて不満を言わず、日本人とおなじように過ごすなら反対する理由はない（どちらかといえば賛成）
- 日本人が職を失うという声もあるが日本のルールを守って暮らせるならいいと思う。（どちらかといえば賛成）
- 住むのは別に悪くないけど、ただでさえ少子化が進んでいて日本人が少なくなっているのに、外国人が増えすぎては困る（どちらかといえば反対）

二つ目のInterpretative Repertoireは、「移民は日本の治安を脅かす」というものである。これに関しても「どちらかといえば賛成」から「反対」と答えた対象者の語りを横断してみられた。実際の回答例は以下の通りである。

- 移民・外国人労働者については、働きに来ることに特に反対はしない

が、何となく物騒なイメージがあるので完全に賛成とはいえない（どちらかといえば賛成）

- 移民のように長期滞在する人が増えると文化の違いの視点がないから治安が悪くなるのではと心配（どちらともいえない）
- 日本は治安がいい国と言われていますが、積極的に受け入れれば、まちがいなく治安が悪くなり、危ない国になるから。（どちらともいえない）
- ニュースやネットでテロリストが移民に紛れて入国する可能性の示唆もあるから（どちらともいえない）
- 移民を受け入れると、戦争になったりするかもしれない。（どちらかといえば反対）
- 移民がテロを起こしたり、移民によってさまざまなトラブルが発生しているので、日本の安全が脅かされるのであれば積極的には受け入れてほしくない。（どちらかといえば反対）

このように、イメージとしては「貧しくてかわいそうな白人以外の外国人」である「移民」については、賛成か反対かを聞かれると「どちらかというと賛成」「賛成」と答える割合は高いが、その答えとは矛盾した Interpretative Repertoire を使用して語られることがわかる。

4.3. 「外国人労働者」

「外国人労働者」ラベルに関しては、「外国人」や「移民」以上に具体的で詳細なイメージを描写する学生が多い。東アジア、東南アジア出身者に言及しているものが多いが、その場合は自分のバイト先やよく訪れる店にいる店員など、個人の実体験から持ったイメージを挙げている印象を受ける。

4.3.1. 「外国人労働者」ラベルにみられる人種マーカー

「外国人労働者」のイメージとして挙げられたもののなかで一番多いものが、「外国人」や「移民」ラベルではあまり言及されていなかった「アジア・東南アジア」(41) という言葉であり、そのほかにも「中国」「フィリピン」「ベトナム」

「タイ」などの具体的な国名も多く挙がった。アジア系以外では、「黒人・アフリカ系」(12) という回答もあったが、「白人」という言葉を挙げたのは 104 人中 2 人のみだった。「外国人」ラベルでは、白人のビジネスマンや教師のイメージが挙げられていたが、それらは「外国人労働者」とは別の意味づけをされていることがわかる。

「外国人」の職業のイメージがホワイトカラーであったのに対し、「外国人労働者」はコンビニや工場、肉体労働など、いわゆるブルーカラーといわれる職業と結びつけられていることが多く、「移民」ラベルと同様「貧しい」「経済的に困っている」「出稼ぎ」などの言葉も頻出する。「貧しい国の人が稼ぎ口を求めている」「自国での収入が足りずに出かせぎに来ている人」「低賃金・長時間労働」「工場などで単純労働をしていそう。経済的に苦しい生活をしている」「自国の家族のために日本に出稼ぎに来ている人々、主に中国人が思い浮かぶ。正規雇用ではなく、工場などで働いているイメージ」「安い賃金で長い時間働かされているイメージ。東南アジアから来る人が多い」「低賃金、コンビニで働いているアジア人」などが例として挙げられる。

同じ「貧しい外国人」であっても、「外国人労働者」と「移民」ラベルの意味づけは大きく異なっており、「外国人労働者」は労働者として良い性質を持っている人々として語られる。「技術も高く、一生懸命働く」「ベトナムやタイなどのアジア系の人で真面目な人たち。勉強熱心な人たち」「優しい、礼儀正しい」「努力家、家族を大切にしている」「働き者である」など、ポジティブな描写が少なくない。しかし、「外国人労働者」に対する Interpretative Repertoire は、「外国人」に関するそれとは大きく異なっており、「外国人労働者」が「外国人」ほどには歓迎されていないことがみえてくる。

4.3.2. 「外国人労働者」に関する Interpretative Repertoire

「外国人労働者」の受け入れには 76% が賛成もしくはどちらかといえば賛成と回答している。「賛成」と答えた回答理由のなかには、「少子高齢化社会なので、外国人労働力が重要になると思うから」「最近コンビニやいろんなお店で外人の店員さんを見かけるようになって、その人たちが一生懸命仕事をしている

のを見て応援したいと思うから」といった意見もあるが、積極的に受け入れたいという意見は少数である。「移民」ラベルと同様に、受け入れ拡大に賛成だと回答しながらも、その回答の理由に関する語りにおいて「外国人労働者」は望ましくない人々として語られることのほうが多かった。

一つ目の Interpretative　Repertoire は、「外国人労働者は日本人の仕事を奪う」というものである。これは米国や欧州各国の移民ディスコースにも共通しているものだ。この Interpretative Repertoire に関しては、「移民や外国人労働者」という形で「外国人」とそれ以外という線引きをする際に使用されることも多い。

- 外国人労働者を安い賃金で雇ったら日本人の仕事がなくなる (どちらかといえば賛成)
- 多すぎると日本の労働口が減りそう（どちらかといえば賛成）
- 移民や外国人労働者が増えると、日本人の仕事が減ってしまうかもしれないから（どちらともいえない）
- 移民や外国人労働者が増えることについては、それによって私たちの職が失われたら困る。しかし実際そういった移民や外国人労働者に支えられている産業（工業や農業）もあるから何とも言えない。（どちらともいえない）

また、二つ目の Interpretative Repertoire として挙げられるのが、「外国人労働者は犯罪を起こしたり不法滞在をしたりする」というものである。これも米国やヨーロッパの移民ディスコースと共通している。

- 外国人労働者は違法滞在とかする人も多いので、そこは引っかかるが、労働者が増えるのは良いと思う。（どちらかといえば賛成）
- 仕事のきつさからか失踪するというニュースを最近見たので、積極的に賛成はしない（どちらかといえば賛成）
- 外国人労働者は犯罪者が多そうで怖い。（どちらともいえない）
- 外国人労働者がいることで、私たちの生活のものを安く提供できていると思うのでそれはありがたいことだと思うが、やはり移民と同じ不安があるので半々です。（どちらともいえない）

- 外国人労働者：不法滞在している人が多いから（反対）

「外国人労働者」ラベルへは「真面目に一生懸命働く」という意味づけがされる傾向が高いことは前項で述べたが、受け入れに関する語りでは真面目とは真逆の性質をもつものとして描写されている。この矛盾こそが、Interpretative Repertoire の発露を表しているといえるだろう。

4.4. Positioning:「我々」と「他者」の位置づけ

ここまで「外国人」「移民」「外国人労働者」というラベルそれぞれの意味づけと、そのラベルを使用した語りにおける Interpretative Repertoire を分析してきたが、外国人を日本に受け入れることについての語りにおいて、「我々」と「他者」がどのように位置づけられているのかについてここでは考察する。

過去の研究によれば、ヨーロッパや米国の移民・難民ディスコースにおいては Positive-Us ／ Negative-Others という対照的な Positioning のパターンが多くみられる。例えば、移民や難民のモラルの低さについての語りは、自動的に「我々」が「彼ら」よりも優れているという位置づけを行うことになる。移民・難民の犯罪や違法性についての語りは、「我々」を罪のない被害者という位置に置く。移民・難民の置かれた不幸な状況を嘆き、支援の必要性を述べることは、「我々」を寛大な支援者と位置付けることになる。こういった対照的な位置づけにより、「我々」と「他者」との間にはより深い境界線が引かれていくのである。

今回の結果は、日本のディスコースは米国やヨーロッパでのディスコースが示すような「我々」と「他者」という二元的な境界線による Positioning とは異なるパターンを持っていることを示しているといえるのではないだろうか。なぜなら、これまでの分析が表しているように、「他者」のなかにも「外国人」「移民」「外国人労働者」という階層があり、それぞれとの対比によって「我々日本人」が位置づけられていると考えられるからである。

この違いは白人を指す「外国人」というラベルにおいて顕著になる。「外国人」という他者と「日本人である我々」との位置づけは、グローバル化に関するディスコースである「多様性は社会に有益である」という基準から引かれた

境界線に基づいているといえる。高い専門性や技術、経済力をもった他者は日本にとって有益であり、彼らは「望ましい他者」であるとして位置づけられる。また、「外国人」ラベルを使用した語りにおいては、グローバル化の影の部分である搾取や格差の拡大という部分はあらわれにくく、明るく楽しい国際交流、経済発展、技術の発展といった光の部分にのみ焦点があたる。そしてそこにいる他者は、アメリカやヨーロッパからやってきた白人なのである。外見や内面、能力までも日本人以上にポジティブに形容される「外国人」は決して Negative-Others ではないが、白人であるということに固定されたイメージは、「外国人」が人種的他者であることを表している。

Ideological square が示すような Positive-Us/Negative-Others の対比が顕著になるのは、「移民」と「外国人労働者」のラベルを使用した語りにおいてである。米国のメキシコ移民や、ヨーロッパの中東、アフリカ移民については貧しくかわいそうな人々だという意味づけをしながらも、日本というコンテクストになると、彼女／彼らは日本の文化や規則を受け入れず、治安を悪化させる人々という意味づけをされる。日本の文化を受け入れない「他者」の構築は、同時に他者の文化と日本の文化に優劣をつける。そして危険な「他者」の構築は、被害者であり罪のない「我々」日本人という構図を作っているといえる。「外国人労働者」は貧しいが働きものであるという意味づけはされつつも、彼女／彼らは「我々」から仕事を奪う「他者」であり、また移民と同様に犯罪者である「他者」の被害者が「我々」だという構図が生まれる。日本は外国人労働者を受け入れるシステムが整っていないこと、多文化に対応した環境が整備できていないこと、外国人差別や偏見があることについて言及した回答者もいたが、それはごく少数であり、「移民」「外国人労働者」と「我々」という対立的な位置づけは、米国やヨーロッパのそれと似通ったものであるといえるだろう。

5.　まとめと考察

本研究では、「外国人」「移民」「外国人労働者」という異なるラベルにどのような意味づけがなされ、これらのラベルを使用したディスコースにおいてどのような Interpretative Repertoire が発露するのかということについて分析を

行った。「外国人」は日本に経済的、産業的、教育的利益をもたらすヨーロッパ系白人であり、「望ましい他者」として語られ、メキシコや中東、アフリカからの「移民」は米国やヨーロッパのコンテクストでは貧しくかわいそうな人々である一方で、日本のコンテクストになると日本の文化には馴染まず、治安を悪化させる「望ましくない他者」として語られる。東アジアや東南アジアからやってくる「外国人労働者」は真面目で働き者ではあるが、彼らは日本人の仕事を奪う恐れがあり、また不法滞在を含む犯罪を起こす可能性がある「望ましくない他者」として語られる。これらのラベルの意味づけからは、日本における外国人は日本人以外としてまとめられることはなく、人種により階層化されているということが明らかになった。辞書的な意味で考えるとこれら三つのラベル全てが外国人を指すものであるはずだが、国際化、グローバル化、オリンピック・パラリンピックのディスコースで使われる「外国人」にはおそらく「移民」や「外国人労働者」が意味する人々は含まれていない。「外国人」を歓迎するという現在の日本のディスコースは、白人以外の「他者」を排除している状況を、人種概念には触れることなく「外国人」というラベルの使用によって覆い隠しているともいえる。これは日本における人種なき人種主義（河合，2014）の様式の一つだといえるだろう。

なお、今回の研究は一つの大学の一つの学部の学生を対象にしたものであり、彼女／彼らの語りが日本人全ての語りを代表しているわけではない。また、「語り」とはいえ、対面での会話とアンケート回答とは異なるため、対話の分析からは三つのラベルに関する異なる意味づけや Interpretative Repertoire が抽出された可能性もある[8]。しかし、今回のように「外国人」「移民」「外国人労働者」の受け入れ拡大に賛成か反対かを５段階尺度で答えたうえでその理由を回答してもらうという形式が、Interpretative Repertoire の抽出に適した方法であるということが再確認できたことには意義があるといえるだろう。単に賛成か反対かを量的に測定しただけであれば、対象者の７割以上が外国人全般の受け入

[8] 今回の論文には含まれていないが、今回のアンケートの回答者のうち 13 名に対して後日グループインタビューを行っている。

れに賛成しているというデータにしかならなかったが、実はその回答理由のなかにこそ移民や外国人労働者を他者化し、それを正当化する Interpretative Repertoire がより明確にあらわれていたからである。アメリカ人大学生を対象に人種主義に関するインタビュー研究を行った Bonilla-Silva（2009）は、「私は人種差別主義者ではないが」という前置きの後の発言にこそ人種主義が発露すると主張するが、今回の場合は「移民・外国人労働者の受け入れには賛成するが」という前置きの後の発言をとらえることができたといえるだろう。

今回は「外国人」「移民」「外国人労働者」という三つのラベルに焦点を当てたが、ラベルもその意味付けも、そのラベルにまつわる Interpretative Repertoire も変化するものである。そしてその変化は偶然や気まぐれによるものではなく、必ずイデオロギー的力が背後で働いているものである。本論文の冒頭で言及したように、出入国管理法の改正に伴い、ここ数か月で「外国人材」という言葉を耳にすることが増えた。これは新しいラベルが構築され、意味づけを待っている状況であるといえる。今後この新しいラベルにはどのような意味づけがされ、その意味づけがどのように変化し、またどのような Interpretative Repertoire がこのラベルによって生まれていくのだろうか。

参考文献

河合優子 (2014) 「日本における人種・民族概念と『日本人』『混血』『ハーフ』」岩渕功一（編）『〈ハーフ〉とは誰か：人種混淆・メディア表象・交渉実践』(pp.28-54) 青弓社

観光庁 (2018) 訪日外国人旅行者の受入環境整備
http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kokusai/ukeire.html

厚生労働省 (2018)「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（平成 29 年 10 月末現在）
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000192073.html

日本政府観光局 (2018) 日本の観光統計データ：訪日外客数の推移
https://statistics.jnto.go.jp/graph/#graph--inbound--travelers--transition

法務省入国管理局 (2018) 入管法及び法務省設置法改正について
http://www.immi-moj.go.jp/hourei/h30_kaisei.html

Bonilla-Silva, E. (2009). *Racism without racists: Color-Blind Racism and the Persistence of Racial Inequality in America* (3rd ed.). Rowman & Littlefield Publishers.

Demo, A. (2005). Sovereignty discourse and contemporary immigration politics. *Quarterly Journal of Speech, 91 (3)*, 291-311.

Don, Z. M., & Lee, C. (2014). Representing immigrants as illegals, threats and victims in Malaysia: Elite voices in the media. *Discourse & Society, 25(6)*, 687 –705

Essed, P. (1990). *Understanding everyday racism: An interdisciplinary theory*. Newbury Park, CA; Sage.

Every, D., & Augoustinos, M. (2007). Construction of racism in the Australian parliamentary debates on asylum seekers. *Discourse & Society, 18 (4)*, 411-436.

Flores, L. (2003). Constructing rhetorical borders: Peons, illegal aliens, and competing narratives of immigration. *Critical Studies in Media Communication*, 20(4), 362-387.

Guðjónsdóttir, G., & Loftsdóttir, K. (2017) Being a desirable migrant: perception and racialisation of Icelandic migrants in Norway. *Journal of Ethnic and Migration Studies, 43(5)*, 791-808

Harre, R., & Langenhove, L. (1999). Positioning theory. Oxford: Blackwell.

Jacobs, L. (2017). Patterns of criminal threat in television news coverage of ethnic minorities in Flanders (2003–2013). *Journal of Ethnic and Migration Studies, 43(5)*, 809-829

KhosraviNik, M. (2010). The representation of refugees, asylum seekers and immigrants in British newspapers: A critical discourse analysis. *Journal of Language and Politics 9(1)*, 1–28.

Lynn, N., & Lee, S. (2003). A phantom menace and the new apartheid: The social construction of asylum seekers in the United Kingdom. *Discourse & Society, 14 (4)*, 425-452.

Phillips, L., & Hardy, C. (2002). Discourse analysis: Investigating processes of social construction. Thousand Oaks, CA: Sage.

Phillips, L., & Jorgensen, M. W. (2002). Discourse analysis as theory and method. Thousand Oaks, CA: Sage.

Potter, J., & Wetherell, M (1987). Discourse and social psychology: Beyond attitudes and behavior. London, Sage.

Rasinger, S. M. (2010). 'Lithuanian migrants send crime rocketing': representation of 'new' migrants in regional print media. *Media, Culture & Society, 32(6)*, 1021–1030.

Santa Ana, O. (1999). "Like an animal I was treated": Anti-immigrant metaphor in U.S. public discourse. *Discourse & Society*, 10 (2), 191-224.

Torigoe, C. (2011). *Immigration discourses in the U.S. and Japan*. Doctoral dissertation. University of New Mexico.

van Dijk, T. (1995). Discourse analysis as ideology analysis. In C. Shaffner & A. Wenden (Eds.), *Language and peace* (pp.17-33). Aldershot: Dartmouth Publishing.

van Dijk, T. (1997). Political discourse and racism: Describing others in Western parliaments. In S. H. Riggins (Ed.), *The language and politics of exclusion: Others in discourse* (pp.31-64). Thousand Oaks, CA: Sage.

van Dijk, T. (2000a). On the analysis of parliamentary debates on immigration. In M. Reisigl & R. Wodak (Eds.), The semiotics of racism: approaches to critical discourse analysis (pp.85-103). Vienna: Passagen Verlag.

van Dijk, T. (2000b). The reality of racism. In G. Zurstiege (Ed.), *Festschrift for Siegfried Schmidt* (pp.221-226). Wiesbaden: Westdeutcher Verlag.

Wetherell, M., & Potter, J. (1992). *Mapping the language of racism: Discourse and the legitimation of exploitation*. New York: Columbia University Press.